

「文系」と「理系」の選択は正しい根拠で行われているのか？

普通科の高等学校に通う高校生のほとんどが2年次進級時に「文系」クラスか「理系」クラスを選択することになっていますが、皆さんは、どのように決めましたか？もしくはどのように決めようと思っっていますか？多くの方々が特定の科目が得意/苦手もしくは好き/嫌いで決めているのではないのでしょうか？科目の好き/嫌いにおいてはその科目を担当している教員への気持ちが反映することもあるでしょう。16歳の時のこの選択が、その後の人生を大きく左右するとは、その時は考え及ばなかったのではないのでしょうか。

「文系」を選択すれば大学も文系学部（文学部、法学部、経済学部等）に進学することになり、「事務職」での就職となるのがメジャーではないのでしょうか。一方、「理系」を選択すると大学は理系学部（工学部、理学部、農学部等）へ進学し、研究や開発に係わる「技術職」として就職することがメジャーとなります。とは言え、16歳の時の選択を多くの方々が問題なく受け入れているのも事実だと思います。一度進めるべき方向を決めると腹を据えるのが人間なのかもしれません。

ところで、就職（雇用）においては、「文系」、「理系」の分類はあるものの、違った価値観での分類が行われるようになってきました。それが、「ジョブ型雇用」と「メンバーシップ型雇用」です。

ジョブ型雇用とメンバーシップ型雇用

「ジョブ型雇用」は勤務内容や勤務地、報酬などの労働条件がきっちり決まっている雇用形態です。仕事がありきでその仕事に人を充てる仕事基準の雇用形態ですので、採用の際は条件として示されている仕事内容に必要なスキル・能力があるかが重視されます。実は、欧米諸国の雇用形態はこのジョブ型が主流です。一方、それに対峙する雇用形態が「メンバーシップ型雇用」であり、新卒一括採用や年功序列といった終身雇用を前提とした雇用形態です。この雇用形態では入社時に企業の一員になるメンバーシップを得るわけです。この場合は人がありきで人に仕事を充てる雇用形態です。すなわち、勤務内容や勤務地の範囲は限定されていません。

日本では「メンバーシップ型雇用」が長年行われてきました。よって日本の企業では社員に対する社内教育等で多様なスキル習得をさせ、多くの経験を積んでもらってきました。しかしながら、社内の教育はその会社がもつ既存の技術が前提であり、ITなどの技術革新が目覚ましい新しい分野においては教育体制が整っていないため、人材不足が生じます。すなわち、技術の多様化、多分野横断化における即戦力の獲得には「メンバーシップ型雇用」は馴染まないように思えます。実際、多くの企業が雇用形態の見直しを行っているようです。また、COVID-19の影響からテレワークの急速な普及が要求され、それに伴い本格的にジョブ型雇用が注目され始めています。テレワークをスムーズに導入するためには、個々の社員に労働条件を明示することが不可欠だからです。また、ジョブ型雇用であれば、過程ではなく結果を重視した経営が可能となり、専門分野に特化した人材不足が解決され、国際競争力の強化、多様な働き方の実現等が図られることとなります。これらの観点から雇用形態の見直しや転換が求められているのです。

さて、ジョブ型人材、メンバーシップ型人材を文系、理系との関係で考えてみましょう。ジョブ型は技術との結び付きが強そうです。「理系」を選択した場合は研究力を重視した大学生活を送り、ジョブ型人材に必要な能力を備えてジョブ型人材として活躍するのはいかがでしょうか。一方、「文系」を選択した場合はゼネラリストを目指してはどうでしょうか。この場合はメンバーシップ型人材ですね。「文系」、「理系」の将来設計に、さらに、「ジョブ型」、「メンバーシップ型」を考慮した将来設計が必要のように思えます。

「文系」、「理系」の区別がなくなる？

ところで「文系」、「理系」の区別は欧米諸国にはあるのでしょうか？ 欧米諸国にも「理系」と「文系」の垣根が全くないわけではないようですが、日本のような絶対的な区分は存在しないようです。大学における教育も低学年においては、「文系」、「理系」の区別なく一般教養（リベラルアーツ）教育が行われていて、歴史、数学、生物学、科学、人類学、宗教学、音楽などの広範囲の一般的知識を身につけることとなります。なぜ、日本はここまで「文系」と「理系」を区別してしまったのでしょうか？ これには歴史的な経緯があるようです。

明治時代にその原点があったようです。欧米化諸国から遅れをとっていた日本が、その人材養成を急ぐ中で教育制度をつくり、法律がわかる官僚と技術官僚の両方を育成しようとした。日本の大学はドイツをモデルにしたと言われていますが、当時のドイツの大学もリベラルアーツ重視で専門は緩かったようです。それに対して、明治政府は旧制大学の予備教育機関として設けた旧制高校から「文系」、「理系」に分けてしまったわけで、当時のドイツの大学とは表面的に似ているだけで、中身は異なっています。「文系」と「理系」の障壁は明治時代に作られ、現在の教育まで影響を及ぼしているのです。

ところで、日本は本格的にデジタル社会化（IT化）を図っています。IT化が進む時代に「理系」の素養が文系理系の区別なく必須となると考えられます。高校におけるプログラミング教育の導入、大学におけるデータサイエンス教育の導入がその流れを物語っています。一方で、文系理系関係なく読解力や表現力を持ち、多角的に物事を考えることが要求されています。すなわち、文系にも理系にもリベラルアーツ重視で様々なことを学ぶ必要があるということです。このように考えると、「文系」と「理系」を区別すべきなのかに対して疑問が呈されます。

東大や東工大において「後期教養教育」という概念が出てきました。学部の高学年、大学院においてもリベラルアーツ教育を継続的に行おうとするものです。むしろある程度の専門教育を受けた後でこそ、教養教育が意味を持つてくるのではないのでしょうか。自分の専門が今の社会でどのような位置づけにあり、どのような意味を持ち、ほかの分野とどう連携できるかを考えることなどが必要だからです。

「文系」人材にも「理系」の素養が、そして「理系」人材にも確かな教養が要求される社会になってきました。少なくとも大学における教育においては文系理系の区別のない能力、素養を学ぶためのリベラルアーツ教育重視のカリキュラム構築が必要でしょう。そして、このことが蟻の一穴となり徐々にではあるでしょうが「文系」と「理系」の壁は崩れていくのではないのでしょうか？

(東京都市大学 田口 亮)

